

## 使徒の働き3章「足なえを立ち上がらせる方」

### 1A 御名による立ち上がり 1-10

### 2A 悔い改めの呼びかけ 11-26

#### 1B いのちの君を殺した罪 11-16

#### 2B すべての預言者の子 17-26

## 本文

使徒の働きの3章を開いてください。3章の区切りがありますが、2章からの話の続きで、43節に、「すべての人に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議としるしが行われていた。」というところの続きになります。使徒たちによって、神に畏怖を抱かせるような奇跡が、そして確かにイエスが生きておられるという印が行われているということです。3章は、その奇跡の記録であり、4章ではこのことで捕らえられ、サンヘドリンで取り調べられるという話です。

### 1A 御名による立ち上がり 1-10

<sup>1</sup>ペテロとヨハネは、午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。

ペテロとヨハネは、使徒の働きの中で、二人で動いている時が多く見かけられます。例えば、サマリアでピリポを通して人々が信仰を持ったということで、エルサレムにある教会は二人を遣わします。ヨハネの福音書を見ても、既にイエス様の墓を見に行った時、二人で走っていきました。イエス様がガリラヤにおられた時に、十二人を遣わされた時、「二人ずつ遣わし始めて(マルコ6:7)」とあります。後に出てくるパウロも、バルナバと共にアンティオキアから遣わされましたし、後にはシラスと共に宣教旅行に行きました。「私たちは」という主語が、使徒の働き、また使徒たちの手紙で数多く出てきます。それは、神の働きを証言するため、一人だけでなく、二人以上が必要だということがあるでしょう。宣教の働きの多くが、個人プレーではないことを物語っています。

そして、「午後三時の祈りの時間に宮に上って行った」とあります。ユダヤ人は、朝のいけにえ、夕のいけにえに合わせて、祈りを献げる習慣がありました。そして後で、正午にも祈りを献げる習慣を付け加え、日に三度祈ります。ペテロが、ヤッファの皮なめし職人シモンの家に行った時、正午に屋上に上って祈った話が書かれています(使徒 10:9)。ユダヤ人のイエスを信じる者たちは、その習慣を止めませんでした。今でこそ、ユダヤ教はキリスト教徒関係がない、他宗教だとして片付けられる傾向がありますが、そうではありません。これからのペテロの説教を聞けば分かるように、私たちの信じている神は、「アブラハム、イサク、ヤコブの神(3:13)」であり、ユダヤ人の神なのです。その神が、異邦人をもご自分の救いの計画の中に含んでおられたということです。

そして午前礼拝でお話ししましたように、使徒たち、また弟子たちが祈りに専念している姿が、数多く出てきます。祈りの生活をしている中で、聖霊に導かれ、神の働きをすることができます。

<sup>2</sup>すると、生まれつき足の不自由な人が運ばれて来た。この人は、宮に入る人たちから施しを求めするために、毎日「美しの門」と呼ばれる宮の門に置いてもらっていた。

神殿に、「生まれつき足の不自由な人」が運ばれてきています。宮に出入りしている人たちにとっては、彼の存在はいつもの光景になっていたことでしょう。しかし、霊的には、うめくような状況です。イザヤ書にて、神の救いが来る時に、「足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね」とあります(35:6)。ですから、生まれつきの足の不自由な人が、いつもの場所に連れて来られるということ自体が、まだ神の救いが訪れていないということを象徴しているかのようです。しかも、その門の名前が「美しの門」です。おそらくこれは、オリーブ山のほうから、ケデロンの谷を経て入ってくる「東の門」のことでしょうが、足のきかない人がいるということは、まだ贖いが来ていない、その美しさが来ていないということです。

そして、今でもそうですが、世界各地の宗教施設の前には施しを求める人がいますね。聖書の民イスラエルも同じで、貧しい者を施すことは律法に定められていることで、ユダヤ人にとっての義務でした。そして、貧しい人たちにも事情があります。今のような社会保障制度はありません、身障者の人の働き口はありません。施しによって生きていたのです。

<sup>3</sup>彼は、ペテロとヨハネが宮に入ろうとするのを見て、施しを求めた。<sup>4</sup>ペテロは、ヨハネとともにその人を見つめて、「私たちを見なさい」と言った。<sup>5</sup>彼は何かもらえると期待して、二人に目を注いだ。

ここで思い出すのは、イエス様のまなざしです。生まれつきの盲人を、ヨハネ9章1節では「ご覧になった」とありますが、これは「注意をもって見た」ということになります。弟子たちは以前は、イエス様が誰かに目を留めても、自分たちは不注意だったのは思い出してください。今は、彼らは変わっています。日常の光景であっても、そこに非日常、神の新しい命ある働きを見ていたのです。「私たちを見なさい」とペテロが言っていますね。それは、注意を惹き、これからいうことをきちんと聞いてほしいと思ったからでしょう。彼のほうは、確かに注意を寄せましたが、お金がもらえるとって目を注ぎました。

<sup>6</sup>すると、ペテロは言った。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエスキリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

金銀よりも、はるかに貴いイエスの御名です。そのイエス様の御名の救いの尊さが、生まれてこの方歩いたことのない足で、立ち上がり、歩かせるところに印として現れます。「Ⅰペテ 1:18-19

ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」興味深い逸話があります。キリスト教の歴史の中、トマス・アキナスという修道者が、教皇に呼ばれました。たくさんの金銀がバチカンに入ってきていたところで、教皇は、「金銀は私にはない、と教会は、もう言わなくていいな。」と言ったところが、トマス・アキナスは「立ち上がり、歩きなさい、とも教会はいえなくなりました。」<sup>1</sup>

ここで、「ナザレのイエス・キリストの名」という言葉をペテロが使っています。午前礼拝で、名というのが、聖書ではその人の本質、実体であるということをお話ししました。この方にこそいのちがある、権威と力があるということをペテロは話しています。そして、イエス様が栄光を受けられたということ、神の右の座に着いておられるということが大事です。この方の名には、あらゆる権威、主権、力の上に立てられていることを示しています。御座に着かれているところの権威ある御名です。パウロがピリピ人への手紙でこう言いました、「2:9-11 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」すべての名にまさる名であります。あらゆる主権、力、支配とよばれているものの上に、この方が引き上げられました。

そして、「立ち上がり、歩きなさい」と言います。ここの「立ち上がる」と「よみがえる」と訳されるギリシア語(エゲイロー)は同じです。英語では、rise upと言いますが、rise も立ち上がる時にも使いますし、よみがえる時にも使います。つまり、死者がよみがえるというのは、「死者が起き上がる」とか「立ち上がる」という意味合いなのです。それで、ここの生まれつき足がきかないという状況から、立ち上がるというのは、まさに墓から死者が起き上がるかのような勢いを含むのです。いのちの力が与えられた、ということです。

<sup>7</sup> そして彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、<sup>8</sup> 躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩いたり飛び跳ねたりしながら、神を賛美しつつ二人と一緒に宮に入って行った。

午前にも話しましたが、ペテロが命じてから、次に「右手を取って立たせた」というところは、勇気がいると思います。言っているだけであれば証拠がないですが、起き上がらせる行動を取らせようとしているのですから、間違っていたら言い訳が聞きません。

---

<sup>1</sup> According to Cornelius a Lapide, Thomas Aquinas once called on Pope Innocent II when the latter was counting out a large sum of money. "You see, Thomas," said the Pope, "the church can no longer say, 'Silver and gold have I none.'" "True, holy father," was the reply; "neither can she now say, 'Rise and walk.'" The moral of this tale may be pondered by any Christian body that enjoys a fair degree of temporal prosperity.<sup>1</sup>

ぜひ、信仰の賜物をしっかりと働かせてください。祈り深くし、みことばに親しんでいる時、聖霊が働いてくださっています。主と心が一つになっていくからです。そして、自分では「あれっ、これやっていいのかな？」とか思うようなことを、促されて行おうという思いが与えられます。あるいは、全くそんな促しがなしに、状況が許されずに仕方がなくやっていたりします。そうしたら、それはすごい聖霊の導きであったということもあります。

牧者チャックのところに、車いすのおじいさんが礼拝の後にお孫さんたちによって連れて来られました。それで彼は、癒されて歩くことができるように願っていると思いました。祈っているうちに、「この人を車いすから立ち上がらせ、歩くように命じるように」という強い促しを受けたそうです。祈り終って、この人を立たせたのです。「イエスの御名によって歩きなさい」といったら、その人は歩き始めました！通路を説教壇から礼拝堂の出入り口へ、また出入り口から説教壇の方に歩いてきました。お孫さんたちは、とても興奮して逆立ちしそうになっていたそうです。歩けなくて、もう 5 年経っていたそうです。けれどもこう言いました、「でも、風邪を引いていたので、風邪が直るように祈ってもらおうと思っていました。」チャックは、「もっと具体的に言ってよ！」と思っただけでしたが、とんだ勘違いで、すごいことが起こりましたね。

そして大事なのは、同じような感じで、また別に礼拝の後で車いすに乗った女性を、そのご主人が連れて来ました。「妻は脳溢血になりました。癒されて歩けるように、牧師さん祈ってください。」と行ってきました。この前の礼拝の後のことを思い出したのですが、彼女の上に手を置き、神が癒してくださるように祈りましたが、この前どう祈ったかも忘れてしまい、彼女を軽く叩いて、「主の祝福があるように、これからも祈り続けます。」とだけ言ったそうです。その後で、彼の息子が来て、「なんで、同じように立たせなかったの？」と聞かれたそうです。チャックは答えました。「主が、そのようにする信仰を下さらなかったのだよ。」

信仰によって大胆に動くことが大事ですが、信仰自体もまた賜物であり、聖霊のみこころがあって、初めて大胆になることができます。大事なのは、特別に、不思議としるしを行うように召されていた使徒たちであっても、それでもすべての人を癒していたわけではないことが、手紙の中を見ると分かってきます。パウロ自身が、ガラテヤ 4 章 15 節を見ますと、目が良く見えない状況があったことが伺えます。ピリピ書では、エパフロディトという働き人が死にそうになるほどの病気にかかったことが書かれています。そして、使徒の働き 12 章には、十二使徒の一人ヤコブが、福音書ではペテロとヨハネと共に、イエス様に呼ばれていたヤコブですが、彼がヘロデ・アグリッパ一世によって殺されたことが書き記されています。

ローマ 8 章 23 節に、「御霊の初穂をいただいている私たち自身も」とあります。御霊の初穂のみであり、その全収穫は神の国が地上に到来した時、主が地上に再来した時に与えられます。その時は全ての病が癒されます。それまでは、聖霊のみこころのままに、ある時は癒され、またある時

はそのままであるのです。賜物が与えられます。そして、奇跡や癒しというのは、信仰の賜物と共に働くことが多いです。

<sup>9</sup> 人々はみな、彼が歩きながら神を賛美しているのを見た。<sup>10</sup> そしてそれが、宮の美しい門のところで施しを求めて座っていた人だと分かったら、彼の身に起こったことに、ものも言えないほど驚いた。

主がなされたことを見て、神を賛美しています。そして、2章で弟子たちがそれぞれの言葉で神をあがめるのを聞いた人たちのように、ここでも、「ものも言えないほど驚いた」とあります。福音書の中で、主イエスがなされる御業で驚いたという言葉がありますが、その継続、連続です。私たちの真ん中でも、驚くこと、自分たちの理解では分からないこと、不思議なこと、そういったことを神は用意しておられることを信じていきたいと思えます。

## **2A 悔い改めの呼びかけ 11-26**

### **1B いのちの君を殺した罪 11-16**

<sup>11</sup> この人がペテロとヨハネにつきまとっているうちに、非常に驚いた人々がみな、「ソロモンの回廊」と呼ばれる場所にいた彼らのところに、一斉に駆け寄って来た。

「ソロモンの回廊」は、東の門から入って、「婦人の庭」という神殿の内側の敷地の間にあるところに、南北に延びていた回廊です。外庭、異邦人の庭が、ユダヤ人の入れる内庭の周りを囲っています。その東の部分に南北に延びていたところであると思われます。そこに、一斉に駆け寄ってきました。

<sup>12</sup> これを見たペテロは、人々に向かって言った。「イスラエルの皆さん、どうしてこのことに驚いているのですか。どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。

ペテロは、五旬節の時に聖霊が降られた後で人々が集まって来た機会を使って、主イエス・キリストを宣べ伝えましたが、ここでも同じです。「イスラエルの皆さん」と呼んでいます。これは彼らに対する正式な呼びかけです。「あなたがたは、神に選ばれたイスラエルの民です」ということです。

そして、「どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか」と言っているところ、午前礼拝でお話ししましたが、自分自身には全く力も、敬虔なものもないということをペテロたちは言っています。事実そうでした、彼はよく分かっていました、自分の力と敬虔さなど、少し脅されただけで、イエス様を三度知らないと言ったのですから、これっぽっちもありません。私たちではない、キリストなのだということです。

<sup>13</sup> アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたはこの方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その前でこの方を拒みました。<sup>14</sup> あなたがたは、この聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、<sup>15</sup> いのちの君を殺したのです。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。

ペテロは、五旬節の時と同じように、奇跡の後にイエス・キリストを宣べ伝え、また聖書を解き明かしていきます。「ローマ 10:17 信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」キリストについての神のことばを聞き、それを信じることによって、救われます。奇蹟を見て救われるのではないのです。

ペテロははっきりと、「アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち私たちの父祖たちの神」と言っていますね。イスラエルの神が、イエスに栄光を与えたのだということです。ここにイスラエルの神と、キリストの間に断絶はありません。このイスラエルの神が、キリストを選ばれたということです。

そして、「そのしもべイエス」と言っていますが、これは預言者イザヤが預言した「主のしもべ」を指しています。イザヤ書には、「主のしもべ」の預言が詳細にあり、そこを見るとイエス様の生涯がいかにその預言を成就させているのかわかります。42 章、49 章、52 章 13 節から 53 章など、皆さんも福音書にも出てくるイザヤ書におけるキリストの預言があります。例えば、42 章 1 節、「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。」バプテスマをイエス様が受けられた時の、天からの声です。ここで、「わたしのしもべ」という言葉が出てきます。

そして、主のしもべに栄光を与えたのに、あなたがたが十字架に付けたのだとペテロは、再び罪をはっきりと言います。ここにいるユダヤ人の多くは、祭りも過ぎたので、エルサレムの人たちでしょう。2-3 か月前でしょうか、その時に起こったことはよく知っており、群衆の中に混じっていたかもしれません。

それでペテロは、四つの罪を明らかにしています。第一に、引き渡したことです。ユダヤ人の裁判で有罪を出して、ピラトに引き渡しました。第二に、ピラトは釈放すると決めたのに、拒みました。第三に、バラバは人殺しなのに、この聖なる正しい方を拒んだということです。聖なる方というのは、前回、ペテロが引用した詩篇 16 篇 10 節で、新改訳 2017 では「敬虔」と訳されていましたが、聖なる方を陰府に捨て置かないという約束です。そして、「正しい方」とは、イザヤ 53 章 11 節から来ています。「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。」そして第四に、「いのちの君を殺した」ということになります。ここでは、人殺しのバラバに対比させて、この方はいのちのことばを持ち、また

この方を信じる者にいのちを与えるのに、その君を殺したということです。

しかし、この「しかし」が大事ですね、2章での説教でもそうでした、「神はこのイエスを死者の中からよみがえらしました。私たちはそのことの証人です。」メシアである方、聖なる方、正しい方、そしていのちの君である方を、神が死の中に閉じ込めたままにするわけがないということです。そのよみがえりを見た証人です、私たちは、ということです。

<sup>16</sup> このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの前で、このとおり完全なからだにしたのです。

こうやって、ペテロはイエスの御名を宣べ伝えました。この方がよみがえられ、この方は栄光の御座に着かれており、その御名によって彼が完全な体になったのだ。彼が、主の復活の明らかな証拠なのです。みなさんにも、イエス様の名を信じる信仰によって、罪によって損なわれていたものが回復し、それで文句なしで、反証できないかたちで、イエスが生きておられることを証しすることができます。

## 2B すべての預言者の子 17-26

<sup>17</sup> さて兄弟たち。あなたがたが、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたことを、私は知っています。

ペテロが、ここで彼らに憐れみの言葉をかけます。「さて兄弟たち」と呼びかけていますね。そして、「無知のためにあのような行いをした」と言っていますが、イエス様が十字架の上で何と祈られたか知っていますね。「ルカ 23:34 父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」自分の罪のゆえに目が見えなくなっていました。自分が何をしているか、分かっていませんでした。パウロもかつて迫害者で、後にテモテに言いましたが「I テモ 1:13 しかし、信じていないときに知らないことでしたことだったので、あわれみを受けました。」とあります。私たちも、キリスト者に対して理不尽に反抗的で、不義を行っている人について、「神を知らないで、しているのだ」という憐れみの心を、求める必要があります。

<sup>18</sup> しかし神は、すべての預言者たちの口を通してあらかじめ告げておられたこと、すなわち、キリストの受難をこのように実現されました。

2章の説教では、「2:23 神が定めた計画と神の予知によって」と言っていました。ここでは、「すべての預言者たちの口を通して」と言っています。ペテロや他の弟子たちは、復活したイエス様から直接、キリストが苦しみを受け、それから栄光を受けることについて、聖書全体からの解き明か

しを聞きました。それに基づいて、今、キリストの受難が実現したのだとペテロは説いています。こんなことはあってはならない罪、聖なる正し方、いのちの君を殺すなどともない罪なのですが、しかし、それさえも神は予め預言者たちを通して告げておられたのです。

ペテロは引き続き、預言者たちの言葉、つまり聖書の言葉から彼らに説いています。ペテロがいかに、聖書に精通しているか、すごいです。当時は、聖書自体は手にしていません、会堂で巻物にあります。ですから、彼はそれを基本的に覚えていました。4章で、彼がサンヘドリンで高らかに主の御名を宣言した時も、彼らはペテロとヨハネが無学のものであることを知って、驚いていました。しかし、覚えていますが、イエス様は既に聖霊の約束で、こう語っておられたのです。「ヨハ14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」聖霊が助けてくださるのです。私たちがぜひ、聖霊の助けによって、御言葉に精通できますように。

<sup>19</sup> ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます。

2章の説教では、「罪が赦される」ことを語りましたが、ここでは悔い改めたら、「ぬぐい去られま

す」とあります。当時の文書は、インクのようなものではなく、書いても文字通り、拭い去ることができるそうです。私たちの感覚だと、データの抹消ですね。あまりイメージがよくないですが、イエス様が苦しまれたことによって、私の罪のデータが抹消されたのです。ですから、最後の審判の時に、行いの書には、私の罪がそこに書き記されていないということなのです。まるで一度も罪を犯したことのないように記録されている、それはキリストの身代わりの死のゆえです！

<sup>20</sup> そうして、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わしてくださいませ。<sup>21</sup> このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。

ペテロは、同胞のユダヤ人に対して、聖書から話しています。私たちキリスト者は、天の御国と言え、死んだ後に行く死後の世界というように捉えるでしょう。しかし、それは根本的に間違っています。天とは、神が王座に着いておられるところです。つまり神が王として支配しておられるところが、神の国です。それが、地上ではなく、第三の天と呼ばれる、神の御座のあるところでもあるし、イエス様が地上におられた時は、主がおられるところが神の国でした。そして、イエス様が戻って来られたら、キリストが統べ治める地上における神の国が立てられます。ユダヤ人の待ち望んでいた神の国は、このような地上でメシアが統治する、目に見える王国であります。ユダヤ教では、ティックン・オラムと言います。世界の回復という意味です。

それが、「回復の時」とありますね。これは、「アダム

損なわれてしまった地を回復する」という意味です。これが、主の第一の目的です。それは、神から離れた魂が神に立ち返るだけでなく、呪われてしまった地が神の目的の通りに建て直されることを神は願われています。それが、預言者たちが何度も何度も語ってきたことであり、私たちによく知られているのが、弱肉強食の動物界が、なんと獅子が牛と共に草をはみ、乳飲み子がまむしの住む穴に手を入れても害を受けないという世界です(イザヤ 11 章)。パウロが、このことをローマ人への手紙 8 章で語っています。「ロマ 8:18-22 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないと思はれます。19 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。20 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」

ここの「回復の時」また「万物の改まる時」の背後にある律法は、レビ記 25 章にあるヨベルの時です。五十年に一度来ます。主がイスラエル十二部族に土地を割り当てます。しかし、自分に割り当てられた土地を、貧しさのゆえに売り渡さないといけないことがあります。そのようにして、主の与えたものが、人間の所有となってしまいます。しかし、五十年後、どんなに負債のある人でも、土地を失った人でも、すべてが帳消しになり、元の所有の地に戻ることにできるようにするものです。これが人が犯した罪によって負債ができ、個人が、また社会が、そして世界が負い目を追っているけれども、それらをすべてリセットして、神の初めの姿に戻すということです。そして、それが、天に留まっているイエス様が、戻ってくる時に万物が回復するということです。

<sup>22</sup> モーセはこう言いました。『あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。彼があなたがたに告げることすべてに聞き従わなければならない。<sup>23</sup> その預言者に聞き従わない者はだれでも、自分の民から断ち切られる。』

ユダヤ人にとって、最も偉大な預言者はモーセです。申命記の最後に、モーセの生涯がまとめられています。「34:10-12 モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼は、【主】が顔と顔を合わせて選び出したのであった。それは、【主】が彼をエジプトの地に遣わして、ファラオとそのすべての家臣たち、およびその全土に対して、あらゆるしるしと不思議を行わせるためであり、また、モーセが全イスラエルの目の前で、あらゆる力強い権威と、あらゆる恐るべき威力をふるうためであった。」このような預言者ですが、彼が前もって、「わたしのような預言者があなた方のために起こされる。」と預言していました。それで、ユダヤ人は待っていたわけです。事実、福音書の中でも何度となく、「あの預言者(ヨハネ 1:21)」であるとか、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ。(ヨハネ 6:14)」という言葉で、期待していたことがわかります。そして、もしこの預言者に聞き従わないのならば、民から断ち切られるという警告があるのです。ペテロは今、その預言者とされたイエスが来たのだから、この方に聞き従わないならば、民から断ち切られると

いう警告があるのです。

<sup>24</sup> また、サムエルをはじめ、彼に続いて語った預言者たちもみな、今の時について告げ知らせました。

モーセの次に現れた、大きな預言者としてはサムエルです。士師の時代が暗黒でしたが、サムエルが立てられて霊的復興がイスラエルの間で起こりました。そして、ずっと預言者が何度となく現れました。彼らが、それぞれの状況の中で世界を回復する方が来られると預言しており、その方が来られたのだということを、ペテロが述べているのです。

<sup>25</sup> あなたがたは預言者たちの子であり、契約の子です。この契約は、神がアブラハムに『あなたの子孫によって、地のすべての民族は祝福を受けるようになる』と言って、あなたがたの父祖たちと結ばれたものです。<sup>26</sup> 神はまず、そのしもべを立てて、あなたがたに遣わされました。その方が、あなたがた一人ひとりを悪から立ち返らせて、祝福にあずからせてくださるのです。」

今、聞いているユダヤ人に、このようにして預言者たちの預言によって綿々と受け継がれてきた神の言葉があり、あなたがたはその預言によって生きるのだということを、「預言者たちの子」という言葉で言い表しています。そして話を「契約の子」に移しています。こちらは、アブラハムとの神の契約です。その契約の中にも入っていますが、そこでの約束が、「あなたの子孫によって、地のすべての民族は祝福を受けるようになる」であります。その子孫とはイスラエルの民というだけでなく、民から出てくる一人の子孫をもさしています。それがキリストです。キリストがアブラハムの子孫から出てきて、この方によって祝福がすべての民族に与えられます。まず、血縁のアブラハムの子孫が悪から神に立ち返って、彼らが祝福となるようにと励ましているのです。

パウロは異邦人のクリスチャンたちにも、アブラハムの祝福の約束があることを教えています。「ガラ 3:13-14 キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。」約束の御霊がその祝福の一つです。御霊が、やがて来る御国の頭金のようなもので、祝福です。後には、言語に絶する祝福以上の至福がきます。キリストの与えられる万物の回復は、想像を完全に超えるものです。その一部を前もって、御霊の降り注ぎで与えてくださる、私たちに御国のすばらしさを味わわせておられます。それはすべて、私たちの罪から来る呪いを、十字架の木でイエス様が身代わりに負ってくださったからです。